
チートな俺が異世界へ進出！

四次元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな俺が異世界へ進出！

【Nコード】

N4266Z

【作者名】

四次元

【あらすじ】

「私達の世界を救ってください！」「いいよー」

退屈な日常を送っていた高校生、霧島燈弥^{きりしまとつや}。異世界からやって来たという女性の頼みで、ノリノリでいざ戦乱真っ只中のファンタジーの地へ！ 腐敗した政治家、やる気のない市民など戦争以前の問題が山積みの国に迎えられながらも、燈弥は二年以内に戦乱を終結させることを宣言し……

安心・安全の主人公チート物です。不定期更新になりますが、読者様からのツッコミをお待ちしております。 ペコリ

0・ぶるーく？

S県S市M町。県立鳴海ヶ丘高校。

この国においては何の変哲も無い普通制の高校であるが、ただ一つ名物と呼べるものがある。

今では物置同然にしか使われていない、旧校舎一階の一角にある男子トイレ。

この一角の大便器の個室の扉が何をやっても開くことが出来ず、『開かずのトイレ』とまことしやかに騒がれていた。

どのくらい開かずかというと、見た目は金属の金具を取りつけたごく普通の木製のドアにも関わらず、異常なほどに防御力があるのである。

素手で蹴る殴るなんてもつてのほか。モップの柄や金属バットを叩きつけてもびくともしない。業者を呼んで、チェーンソーや溶接用のバーナー、果てはダイヤモンドカッターを持ちだしても傷一つ負わないのである。じゃあ周りから崩そうと校舎ごと重機にかけようとしても、何やら不思議な力で機械が止まる始末。他にも除霊師や超能力者などを全国から呼び寄せたが、全く手に負えず。最終的には国側も「金が勿体ないし、この国ではよくあることだろう」と完全放置を決め込んだ。

そのせいで未だに旧校舎を取り壊せずにいるのだが、心霊スポットとして一部のマニアにとつての名所となっている。実際は別に呪いの類も一切無いので、学校側も「何をやっても壊れないトイレの扉」として、外部から入場料を取っている。

「ところがそつでもないんですよ！」

と、2年6組の帰りのHRの後の教室に、歴史マニアのR君の声が響き渡る。

「色々調べてみたら、20年前にあの付近で女子生徒が行方不明になっっているんです！ あそこが開かずのトイレと呼ばれたのもちようどその時からで……」

R君の熱弁もどこ吹く風、クラスの大半は放課後のBGM代わりとしか思っていない。

「でも20年前の話だしねー」

「幽霊見たって騒ぎもないし」

「そもそも、男子トイレなのに何故女子生徒なんだ？」

今どきの冷めた子供を体現するかのようになり、話を流すクラスメイ卜達。

そんな中、教室ないに机を叩く音が響き渡る。

「……どうしたの？ Y君」

「いきなりポップンの練習？」

Y君は声変わりすら始まっていない、幼い風貌のおとなしい男子であった。しかし音ゲーをやらせると人が変わったかのように髪が逆立ち、顔つきもロケンローラーと化すので、鬼ドラマーとしての将来が期待されている。ちなみにこの設定は今後生かされることはない。

「俺……聞いたんだ……」

彼の一言にクラスの喧騒が一瞬で止む。R君は心の中で自分との扱いの違いを嘆いていた。

「この前何となく夜中に目が覚めて、あのトイレに行ってみたら…… 午前4時半くらいだったかな？ いきなりドアの中からドンドンッて叩く音がして、その後中から……女の人の声が……！」

Y君の独白をクラスメイトは、はては廊下にいた隣のクラスの生徒まで固唾を呑んで見守っていた。R君は心の中で自分の存在意義を必死に問いかけていた。

「何て……言つてたの……？」

「『開けて……誰か……誰か……いませんか……？』って……！ その後に呻くような声も聞こえて……！ 凄く怖くなって、すぐに逃げ出したんだけど……！」

興味津々で耳を傾ける生徒たち。女子生徒の一部は「私そういう話弱いんです」「的な、か弱い女の子を演じるために小さな悲鳴を上げる者もいた。」

「やっぱり幽霊とかはいるんですよ！ 明日は休みだし今夜にでも僕と一緒にそのトイレに行く者はいませんか!？」

R君の提案は華麗にスルーされ、生徒の大半はY君により詳しい話を聞こうと詰め寄っていた。そして話し合いの結果、クラス代表として中二ネーム三兄弟と呼ばれる男子生徒達がその日の晩、現場へ向かうこととなった。

霧島 燈弥。

一之瀬 蒼鉛。

神木 鞞かみき しゅう

三人はY君の証言を頼りに、午前4時頃に学校に侵入。旧校舎の玄関の前に置いてある箱に、勤務時間外入場料一人500円を投入し校舎の中へと足を踏み入れる。非常に危険を伴う（かもしれない）この任務を行うにあたって、彼らはクラスメイトからいくつか武器を募った。

ガス銃、金属バット、鈍、スタンガン、警棒、アーミーナイフ、防犯スプレー、非常食、防犯ブザー、お経の入ったMP3プレーヤーと大音量スピーカー、エリクサー（自作）、セクハラ防止用のレツドカード（『あなたのその行為、セクハラでは？』と書かれている） e t c ……

1ナノの憂いも与えないこれらの重装備を抱え問題の現場へと向かう。

「ただ今午前4時35分つと」

「幽霊来るかなー？」

「一応お経のセツティングはしとくぜ。どれが有効か分からんから、カテゴリ内のランダム再生でいいか」

特に緊張感も無く三人は例のトイレの前で待ち続ける……が、ここである事に気づく。

「……臭え！ 誰か消臭スプレーとか持ってねーか？」

「トウガラシ抽出物の奴しかねーよ」

「あーこれはとんだ誤算だったなー」

流石にこの空間に10分以上いるのはきつい、三人がそう思っ取りあえずトイレの外まで退避しようとした、まさにその時であっ

た。

ドンドンドンッ！

「……ッ！」

「ほんとに来たっ！」

ドンドンドンドンッ！

「間違いなくこの中からだ……（小声）」

燈弥がそのドアに実際に触れてみて確信する。

『どなたか……どなたかいませんか……！？ 開けて……開けてください……！』

三人は顔を見合わせ頷く。

まずは先手必勝。幽霊タイプなら精神攻撃が一番有効なはず！
鞆がスピーカーの音量を最大にしてMP3プレーヤーを流す。

『……えーこの厳しい世の中を幸せに過ごすためにはね、一日一日を大事に、大切に過ごして下さい。今日はいいい事があると思って……』

………

「何でお経カテゴリーに瀬戸内 聴が入ってるんだよ!？」

「俺（蒼鉛）が大ファンなんだよ！ 悪いか！」

鞆が別のお経に変える間もなく、ドアを叩く音が止まる。

『そこに誰かいるのですか!?!』

しまった、と三人は戦闘態勢に入る。

「ええ、いますよー あなたは幽霊さんですかー? アーユーアン エイリアーン?」

『ゆ、ユレイ!?! 違います!?! 私はシンクラッド王国親衛隊のセレーヌマシユガルという者です! あの、よろしければこの扉を開けて頂けませんか!?! こちら側からでは全く……!』

シンクラッド? 親衛隊? 何そのいかにもなファンタジー臭い用語。

三人は顔を見合せたままどうしたものの戸惑う。

「いやー開けてくださいって言われましてもね、こっちもそのドアが開かなくて非常に困ってるんですよ」

『ええ!?! そんな……!』

その事を伝えた途端、女性の声が涙交じったようなものになる。

『お、お願いです! 何とか出来ませんか!?! 私もあまり長い時間ここに居る事は……!』

「なんで?」

『その……臭いが……!』

20年間も放置されてきた大便器だ。しかも汲み取り式。個室の外にいてもその片鱗が漂って来るというのに、その中は想像を絶するものに違いない。三人はこのセレーヌという女性(?)を気の毒に思いつつも、手をこまねくことしか出来ない。

「どうしようか？」

「親衛隊か幽霊かはともかくとして、何だか可哀想だな」

「両側から力を加えたら開いたりして」

燈弥がドアノブに手を掛ける。

「セレー又さんでしたっけ？ 中から鍵はかかってませんか？」

『鍵？ ……この取っ手の下のものですか？』

「そうそう、それが開けば」

『駄目です、完全に錆ついててびくともしません。何度か剣で壊そうとしたんですが余計に歪んでしまっ』

「（剣なんて持つてるのかよ……）」

これはもう駄目かもしれないと、その場が諦めモードに入った時、トイレのドアの隙間から光が漏れて来る。

『きゃっ！？』

「どうしたんですかー？」

「おい、何か隙間から光が……」

カチリ。

「……………」

辺りに金属音が響き、燈弥はゆっくりとドアノブを回して、引く。

「あっ」

そして驚くほど簡単に、あっさりとトイレのドアが開いた。

蒼鉛が後ろからライトで個室の中を照らす。

「っ……………！」

中には、眩しそうに手でライトの光を遮っている女性の姿があった。

ブロンドのシニヨンヘアに明らかに欧米風の顔立ち。そしていかにも中世風の鎧。

「外人だ」

「外人の幽霊だ」

「ユーレイではありません……………」

中から表れた女性はもう辛抱たまらないといった様子で個室から出て、大きく深呼吸する。

「や、やっとまともに息が……………」

燈弥が個室の中を覗き込むと、鼻が曲がりそうなほどの悪臭が便器から漂って来る。

「……………いつからこんな所にいたんですか？」

「今日は先刻来たばかりですが、かれこれ一月はここを訪れて……………」

「一ヶ月もずっとこんなことを……………？ この中で？」

「はい……………しかしこの程度の苦難、勇者様に出会えると思えば……………」

……………」

女性はやれやれといった感じであったが、すぐに咳払いをして姿勢を正す。そして燈弥に向かって片膝をつき、手を眼前に組んで頭

を下げる。

「……御見苦しいところを失礼。改めまして勇者様、此度は私達の世界を救って頂きたく参上いたしました」

0 ・ ぶろろーぐ？（後書き）

この度、初めて異世界召喚ファンタジーを書かせて頂く四次元よじぎはじゅうめという者です。

コミコミどころ満載のストーリーにする予定なので、暇つぶしにでも読んでもらえれば幸いです。

1. いきなりのばーさず

「え？ 勇者って……俺？」

燈弥がキョトンとしながら自分の顔を指差すと、セレーヌも少し困った様な表情になる。

「え？ あ、はい」

「おいおい！ ちょっと！ 何で燈弥が勇者なんだよ！？ 俺達は違うの！？」

後ろから蒼鉛が彼女に対して抗議の声を上げる。

「いや、何故と申されましても……決まりとしか……」

「何だよ、その決まりって。俺達と燈弥の何が違うんだよ！？」

「その…… こちらの世界に来て最初に会った方が勇者様だということになってまして…… 詳しい話は私にも……」

セレーヌは戸惑いながらも、気まずそうに答える。

「何だよその雛鳥みたいな決定法は！？ 納得いかねえ！」

「『私達の世界を救ってください』って異世界ファンタジーとかそういうの？ 燈弥の代わりに俺が勇者とかじゃだめ！？ どうせ適当なんだろその辺！？」

「おいお前ら何言ってるんだ！ 俺だって行ってえよ異世界！ しかも勇者なんだろ！？ 行かない手はねえ！ よっしゃセレーヌさん！ あなたの見立ては間違ってる！ さあ早速俺を異世界へ！」

俺が俺が、とわーわーもみくちやになる少年たちを見てセレーヌは呆気にとられていた。取り留めのない争いがしばらく続き、最終的に三人の意見がまとまる。

「よし、セレーヌさん。この際誰が勇者だとかはどうでもいい。俺ら三人まとめて異世界に連れてってください！」

「無理です」

「ええー」というブーイングの嵐が少年達から巻き起こる。

「私達の世界に連れていけるのは一人だけです」

そう言つとセレーヌが懐から古びたネックレスの様な物を取り出す。

「次元の扉を通るにはこれを身につけないといけません。今手元にあるのは私が身につけている物を含めて二つのみ……つまりはこの中からお一方だけしか、あちらへ連れていくことが出来ないのです」

それを聞いて迷わず鞆の手が上がる。

「……何でしょうか？」

「セレーヌさんはこつちの世界に興味とか無い？」

セレーヌは7秒ほどしてその質問の意図に気づき、思わず身構える。

「だ、駄目です！ 私にも帰ってからやる事が色々あるんです！」

「えーこつちの世界も結構楽しいと思うよ？ 異世界から来た人な

ら刺激だらけの生活を送れると思うしさ」

他の二人も腕を組みながらうんうんと頷く。セレーヌはこれまでに味わったことのない身の危険を感じた。

「……帰らせて頂きます」

「えっ!?!」

「勇者様はまたの機会に……」

彼女が個室に戻ろうとするところを、すぐさま蒼鉛が道を塞ぐ。

「どいてください…… たとえ本当に勇者であられたとしても、今のあなた達を連れて帰るのは気が引けます……」

「やだ、二人まで異世界に行けるってのを諦めるわけにはいかなー」
「そうですか……」

セレーヌが腰元に手を掛けたかと思うと、蒼鉛の頬に一閃が走る。

「げっ」

蒼鉛の頬のから血が垂れる。セレーヌの握っている獲物は間違いなく実剣であった。これまでの畏まった表情とは異なり、完全に戦う者、殺しが出来る者の目つきになっている。

「もう一度言います。そこをどきなさい。次は本当に殺しますよ?」

今までとは打って変って冷たく罵るような口調にも、蒼鉛は軽く口笛を鳴らすのみであった。

「(どうせ斬れっこないとも思ってるのかしら…… まあ、彼は

勇者でもないし）」

セレー又は何の迷いも無く、剣を蒼鉛の頭の上から垂直に振り下ろす。

「ッ!？」

周囲に鈍い金属音が響く。

セレー又の剣は燈弥の握った金属バットによって受け止められていた。

「今のは本気で殺るつもりだったな？」

「……トーヤ、と言いましたか」

「へい」

セレー又は一步後ろに下がり間合いを取る。

「仮にも一度勇者様と認めた方と交えるのは心苦しいですが……」

私とて騎士の端くれ」

「ああ、二流だな」

「何ですって……?」

燈弥は金属バットで自分の肩を叩きながら、余裕たっぷりな答えを返す。

「『次は殺す』なんて二流が吐く台詞だ。自分から負けフラグ立ててるってやつ? 邪魔だと思っ奴は即始末しとかないと、いつか足をすくわれるよ」

「……知ったような口を!」

セレー又は瞬時に燈弥の胸元めがけて突立てる。彼女の頭には金
属バットが棍棒のようなものと認識され、始めから打ち合うとい
う発想はなかった。

だが、燈弥はそれを最小限の動きで回避する。

「なにっ!？」

「考え方は悪くないけど、当たり判定がねー」

セレー又が体勢を戻す間もなく、燈弥は瞬時に彼女の懐に飛び込
み下顎にアッパーを叩きこむ。彼女の体が軽く浮き、そのまま壁に
叩きつけられた。

「へへー俺の勝ちー しかし、騎士相手でこれか。結構やっていけ
そうだな」

まるで遊んでいるかのような燈弥の言い草に対してセレー又は名
状しがたい寒気を覚えた。そして、燈弥はまだ意識が朦朧としてい
る彼女に近づき、満面の笑みで手を差し出す。

「さ、ネックレスちよーだい」

「あー! ずりいぞ燈弥!」

「この人にも勝ったんだし、俺は異世界行き確定だろ?」

彼女はまだ剣を離していないというのに、少年達はまたもや下ら
ない言い争いを続ける。

「（私も未熟とはいえ、剣を持った相手にこの余裕…… 大物では
ある、か）」

セレー又は体の感覚を徐々に取り戻すと、頭を軽く振って剣を収

める。

「あ、お早い御復帰で」

「……失礼いたしました、トーヤ様。あなたが勇者だというのも本当、かもしれません」

よろめきつつも立ち上がる彼女に向かって送られるのはまたも非難の言葉。

「かも！？ まだ、かまなのかよ！？」

「私も確証は持っていませんので……」

セレー又は燈弥に向けて手を差し出す。その手には例のネックレスが握られていた。

「ですが、素質は十分だと思います。どうか私と一緒に来ていただけませんか？」

「ひゃっほーい！」

燈弥は乱暴にセレー又の手からネックレスを奪い取り、手にかざしてその場を跳び回る。その様子を見て、セレー又は軽く後悔しつつもトイレの個室へと向かう。

「待てや」

そんな彼女の前に二人の少年が立ち塞がった。

「……勘弁してもらえませんか？」

彼女の顎をさする様子も知ったこっちゃんないと言わんばかりに、

二人して首を横に振る。

「残りの椅子は一つ……次は俺と勝負だ！」

「いやいや、先に俺とやってもらう」

先程の燈弥との立ち回りを見て、自分でも勝てるかと確信したのか二人の少年は互いに譲らない。そんなやりとりを見ながらも、セレー又は必死に跳びはねている燈弥に目くばせをする。

「へへ、何か勘違いしてないか？ お前ら」

互いに掴みかかっている蒼鉛と鞆の前に立ち、燈弥はあざ笑うかのように言い放った。

「こういう展開の時はな……勇者は一人って決まってるもんだぜ」

二人が燈弥に気を取られた瞬間、セレー又は二人が争っていたせいでできた僅かな隙間を潜り抜け、トイレの個室へと入る。

「あ！ この！」

蒼鉛の手をすりりとかわし、セレー又はそのまま大便器の中へ飛び込む。すると彼女の体はそのまま吸い込まれるかのように姿を消してしまった。

「うげっ！？ 次元の扉ってここかよ！？」

「そうだ！ とう」

「隙ありい！」

二人が気づいた時には既に遅し。燈弥は防犯用の痴漢撃退スプレ

―を二人の顔面に噴射する。ハバネ口由来のカプサイシンが有効成分となり、二人の視界を封じる。

「この……やる！」

闇雲に手を振り回す二人であったが、燈弥はそれを難なく避け、そのまま大便器の中へとダイブする。ようやく二人の視界が戻りかけた時には既にその場に他の人間の気配はなかった。

「とうや〜！ あのやる〜！ 自分だけ……」

「いいなあ〜 あんな外人さんと……」

悪臭が漂う旧校舎の男子トイレの中、ただ残された二人。この匂いに長く耐えられないと思わず大便器の個室の扉を閉めるが、すぐに金属音が鳴る。

「あ、開かない……」

「ここって異世界への入り口だったんだな……」

気が付くと自分たちの持ってきた荷物も色々無くなっていった。ちやっかり燈弥が餞別代わりにと持ち出したのであろう。

「どっするよ……」

「どっするって……帰るしかないだろ？」

「みんな信じるかな……燈弥一人いなくなって」

残された少年二人は渋々荷物をまとめてその場を退散する。

幸いにして燈弥には「保護者」はいないので、別段これから面倒な取り調べが待っているわけではない。いや、蒼鉛と鞆にも保護者

はいない。クラス、学校の誰ひとりとしてそんなものは持っていない。故にこの二人は燈弥を羨む。自分たちのこれからを比較してしまつたため……

「ちくしょー！ 燈弥あー！ とつととくたばれー！」

「そして次は俺が勇者だー！」

徐々に日が射していく夜明けの空に、夢見る少年二人の音が響いた。

2・いせかいつてこんなもの？

「セレー又さん……いつになったらここ出れるの？」

「もう少しの辛抱です……」

水滴の音と小動物の鳴き声が微かに響き渡る暗闇の中、燈弥とセレー又は筏を漕いでいた。

現在位置、下水道。彼らは蠟燭の僅かな火を頼りに、悪臭立ち込める狭い空間を進む。

「トイレを抜けた先は下水道とか……幸先悪いなあ。折角の異世界召喚ライフなのに……」

「何をそんなに楽しみにしているのか知りませんが、これからあなたには戦って貰わないといけないですよ？ 当然、命を落とす可能性だってあります」

この悪臭のせいもあるのか、セレー又は苦々しい顔で燈弥をたしなめる。正直彼女自身も彼をこんなにすんなり説得出来るとは思わなかったのだ。今までの暮らしを捨てて、全く未体験の地で戦わせるといふことがどんなものか。こちらの世界に来る事を拒まれたらどうしたらいいのだろうか？ ずっとそんな不安を抱えていた。しかし、そんな気苦労もどこ吹く風、目の前の少年は呑気に鼻歌を歌っている。

おまけに燈弥はオールを握った経験がないにもかかわらず、すぐに漕ぎ方のコツを掴んでいた。ほどなくしてセレー又よりも速く焦げるようになってしまい、筏の進み方も偏ってしまう。

「……トーヤ様、もう少しゆっくり漕いでくれませんか？」

「へーい、了解」

燈弥が軽口を叩いてほどなくすると、前方から光が見えて来る。さらに吹き込んでくるのは、久かたぶりのまともな空気。

「よーし！ 到着つと！……で、いいんだよな？」

「はい、その岸に寄せましょう」

二人は筏を岸につけ、水路の階段を上る。その先に入ってきた光景に燈弥は思わず声を上げる。

「おおー いかにもな中世って感じ！ ファンタジーだねー！」

「ここがシンクラッドの商業都市、スミナフです」

赤白レンガ造りに、傾斜のきいた屋根が乗った家がずらりと並んでいる。加えて街から離れていても聞こえるその喧騒と何やら楽しい音楽。

「まずはこの町の領主のアイゼン様の所に伺います。さ、こちらへ」

「え？ わざわざ異世界から連れて来た勇者なんだから最初は王様の所じゃないの？」

「……どうしてそのような発想に至るのかは分かり兼ねますが、このままの身なりでは失礼でしょう？」

燈弥もそう言われて初めて気づいたが、服に下水の水滴が飛び散りいくつもの染みを作っている。おまけに長時間悪臭のする空間にいたので、彼ら自身が発する臭いも相当なものであった。

「……こつちの世界に風呂とかシャワーとかある？」

「シャワーというものは存じませんが、浴場なら」

それを聞いて燈弥も気を取り直し、セレーヌの後をついて行く。彼女は現状を考えて、町の中を通ろうとせず、そのまま町の外周をぐるりと大回りして領主の屋敷へと向かう。町の外には広大な田園風景が広がっており、その開放感がさらに燈弥を上機嫌にさせた。

「でっかい農地だなー 俺の国にはこんな広い土地が無くてさー」

「それだと食料を作るにも大変でしょう？」

「ああ。実際半分以上が他の国からの輸入に頼ってるんだ」

「土地の事情もあるのですが、あまりよろしくないですね……」

今では大した未練もない祖国、日本の事を軽く思いだしながら、燈弥はぼんやりとその風景を眺めていた。……が、目の前の畑に気になる物を見つけ、鼻をくんくんと鳴らす。

「ねえセレーヌさん、ここ…… 畑だね？」

「はい。今はちょうど休耕期の様子ですけど…… それが何か？」

すると燈弥は何を思ったのか急にわき道に逸れて、畑の中に飛び降りる。さらに地面の土を一握り取って、匂いを嗅いだり、ぼろぼろに崩してみたりする。

「ん〜？」

実際に手で土の感触を確かめてみて、燈弥の顔が急に陰しくなる。

「トーヤ様！ あまりお時間を取られましても……！」

後ろから慌てた様子のセレーヌが駆け寄って来る。

「セレー又さん、ここの畑っていつもは何植えてるの？」

「た、確か麦だったと思いますけど」

「……麦ねえ」

名前は同じでも自分の世界のものとは品種が全く違うものかもしれない。そんなことを念頭に置きつつも、燈弥たちは再び屋敷への道を進み始めた。セレー又は少年の前を歩きつつも、その突飛な行動の意味を理解し苦笑いを浮かべる。

「（流石に鋭いわね……！）」

その後、歩く事30分ほど。燈弥たちは一際大きい建物の門の前に辿り着く。セレー又が門番のところまで駆け寄り何やら話をする、すぐに重たそうな鋼鉄の門が開かれた。中に入るとこれまた広大な庭が広がっており、色とりどりの花を咲かせる植物が植えられている。

「そういえばそのアイゼンって人は貴族とかなの？」

「はい、正式にはアイゼン侯爵ですね。それと出来れば様をお付けください」

「了解。それと爵位はいくつあるの？」

「5つですが……」

「公・侯・伯・子・男？」

「はい、アイゼン様はその上から二番目のお方です」

また何やら考えている燈弥を見て若干の不安を抱きつつも、セレー又は屋敷の扉を叩く。ほどなくして、ドアの中心にある覗き穴のような小さな円形の蓋が開き、何やら話を始める。

燈弥も何となくその辺の庭を見まわしていると、遠くの方に小さ

な人影を見つけた。まだ幼い少女のようであったが、こちらに気づくと軽くお辞儀をしてそそくさとその場を離れる。

「トーヤ様、まだアイゼン様は視察からお戻りになっていないみたいです。その間に風呂に入らせて頂いて、服も着替えておきましょう」

「ああ。ようやく風呂か…… 流石にこの臭いもなれたけど、やっぱり不味いよな」

燈弥は染みだらけの服をパタパタとはためかせた。

「こちらへ。使用人たちの勝手口から中に入れて頂きます」

「え？ 風呂つてこの屋敷のを使つていいの？」

「ええ、私はいつも利用させてもらってます。トーヤ様も客人扱いですでお気兼ねなく」

ちょうど先程の女の子がいた方角に向かい、小さな扉から屋敷の中に入る。使用人用の通路とはいえ、壁も床も手入れが行き届いており、燈弥もこの汚れた服で押し入るのが少し申し訳ないようには感じた。しばらく廊下を進むと、突きあたりに向かい合うようにして二つの入口があった。

「では、私はここで。着替えは入浴しているうちに用意してくれるでしょう」

「混浴じゃないのか……」

「ありません」

きつぱりと言い切り、セレー又は左の部屋に入っていく。燈弥もすぐすと右の部屋に入る。

中には日本の銭湯の如く広い脱衣所があり、その先の木製の引き

戸を開けると、その先には見事な石造りの浴場が広がっていた。中には松明がいくつもあるが、壁の一面が擦りガラスのようになっており、浴場全体が日中の明るい光に照らされていた。

「ほー 良く出来てんなー しかも誰もいない…… 貸し切りかよー！」

昼風呂なんて久しぶりだと言わんばかりにテンションの上がった燈弥は、荷物を下し服を適当な籠の中に脱ぎ捨てる。湯船に軽く手を入れると、ちょうどいい温度になっておりまさに入り頃だ。

浴場の中には色々と見慣れぬ器具があつたが、そんな物には目もくれず手ぬぐいとお湯だけで体の汚れを簡単に落とし、そのまま浴槽の中へダイブする。

「ひゃー！ 気持ちええー！ 風呂のある異世界とか最高だな！」

まさに極楽至極。燈弥は学校の教室くらいの広さはありそうな浴槽の中を軽く泳いだりして、しばらくの間最高の湯を堪能した。

ガタン。

急に脱衣所の方から聞こえてきた物音に気づき、燈弥はふと手足を止める。屋敷の人が着替えを用意してくれていることを思い出し、流石にあまり音を出してはしゃぎ過ぎるのはどうかと彼の理性が働いた。

「（ふー 早く行つてくれないかなー？）」

浴槽の淵に頭と腕を乗せて、湯船に浮かんで静かにくつろいでいると、いきなり脱衣所の扉が開かれ、燈弥は思わず顔を上げてしま

う。

「失礼いたします。お湯加減の方はいかがでしょうか？」

女の子。

やや茶色がかったおかつぱ頭のまだ幼さの残る使用人の少女であった。緊張しているのか、元々そんな感じなのか顔持ちはやや固い。

「ああ、さいこー。君は……さっきに庭にいた子だね？」

はい、と小さく少女は返事をする。

「勇者様は長旅でお疲れと聞いております。よろしければ私が按摩をして差し上げますが……」

長旅というほどのものでもないが、筏を漕いだりしたので筋肉は結構張っている。

「いいね、助かるよ。んじゃ、風呂上がりにもお願いするかな」

軽い気持ちで返事をした燈弥であったが、少女は首を軽く横に振る。

「いえ、湯冷えするといけませんので……」

「もしかして風呂の中ですか？ 濡れるよ？」

「大丈夫です」

少女は軽く微笑むと自分の服に手を掛けた。

2・いせかいつてこんなもの？(後書き)

R-15の限界に挑戦してみたり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4266z/>

チートな俺が異世界へ進出！

2011年12月15日02時45分発行